

「自分との和解」

エペソ人への手紙 2 : 14 - 18

July.17.2022

エペソ人への手紙 2 : 14 - 18 (パウロ)

Preface

人はいつも、神様との和平関係を自らの罪によって壊してしまいます。

また、自らの罪ゆえに、愛なる神によって創造された被造物との和平関係も壊してしまいます。

さらには、自らを守るという大義名分のもと、他者を肉体的のみならず、人格的に、精神的に追い込み死なす正当な理由があると主張しながら、人を殺めます。

自ら掲げる正義と正義をぶつかり合わせ正義を壊し、平等に与えられるはずの水や食料やエネルギーや自然環境等の神様の一般恩恵でさえも、競争に勝利した結果、知恵や学を用いた結果、努力した結果、生まれつき条件の整ったところに置かれた結果だと言いながら、自らの利益を得る権利や特権を主張します。

そして、このような自己防衛の権利を主張するこの世界は、もうこれ以上全面的に信頼し合うことが出来なくなり、人類全てが相互信頼のもと保護されるのではなく、相互恐怖・恐怖の均衡によって保護されているという矛盾した状態に陥っていることを、聖書に立脚したキリスト教平和主義の視点を確立するのに寄与したジョン・ハワード・ヨダーという神学者が言ったことがあります。

このような世界にあって、旧約聖書の預言者イザヤは、後に来られるメシアが、“平和の君”として来られることを預言しました。

神様と人間との平和を、人と人との平和を、すべての被造物の平和を実現するためにイエス・キリストが来られることを、いやむしろ、イエス・キリストが、そんな世界に平和の君としていらっしやらなければならないことを世界に向かって宣布しました。

そして、この地にいらっしやったイエス・キリストは確かに平和の君として来られ、葛藤のある所に和解を、対立のある所に平和を実現なさり、今も、神と人との和解、人と人との和解、そして神を中心とした万物の和解を成しておられ、神の宣教の核である和解の務めという福音の実践を私たちに委ねてくださいました。

人は、天地万物をお造りになった愛なる神様という存在を覚えなくても、神様から出発しなくても、神様に自分自身を預けなくても、隣人と和解し、平和の関係を持つことが出来ると努力してきましたが、表面的に取り繕った平和ばかりで、いつどんなことがきっかけで着火し、再び葛藤と対立の炎が燃え上がってし

まってもおかしくないような暴力を内包した見掛け倒しの平和と和解ばかりが蔓延る歴史を今の今まで重ねて参りました。

それでも人間は、愛なる神イエス・キリストが平和の君であられることを真剣に考え、論争の真っ只中にお迎えし、イエス様なしには決して成り立たない平和については語ろうとしません。

もし、神を、またはイエス・キリストを口に出そうものならば、「それは人間の理性の敗北であり、人間の限界を認めてしまうことであり、人間が作り出した誇るべきこの文明社会を否定してしまうことになるから、そればかりは譲れん」と、もう既に敗北し、限界であり、否定して当然の状態にあることさえも認めようとしません。

Part One

エペソ書の著者であるパウロも、かつてはそうでした。

「自らの手で、自らの意志で、民族の復興と平和を成すことが出来る」と躍起になっていましたが、イエス・キリストに出会ってしまうと、平和を作り出すどころか、新たな暴力を生み、その暴力を正当化し、正義だと言いながら、熱心に人生をかけて、正義という薄っぺらい皮をかぶった暴力に人生を捧げていたことに気付かされてしまいました。

キリストに出会うと、キリストのない平和はあり得ないということに、人間誰もが気付いてしまいます。

そしてパウロは、「福音は和解だ」という喜びを悟ります。

神と人との和解、人と人との和解、そして造られしすべての被造物・万物の和解こそ、福音の完成であり、福音の中身であるということを知り、その和解の実現こそ、キリスト者に神様が期待しておられることだと公然と語るようになりました。

先週から続くエペソ2章の聖書箇所は、そのパウロの語る和解の福音について書かれた代表的な聖書箇所です。

特にここで語っている和解は、神と人との和解と、人と人との和解についてです。

まず人にとって最も大事な和解は、イエス・キリストの十字架の贖いによって神と和解させていただき、神との平和を持つ者となったということですが、

もし人が、まともに神と和解させていただいたならば、自然と人と人との和解へと促され、人と人との和解に発展するということについて語ります。

ですが、あくまで人と人との和解は、人の力や良い思いによって成されるものではなく、エペソ2:18に「二つのものが、一つの御霊によって」とあるように、キリストを信じた証しとして与えられる聖霊の内在によって、それが可能に

なります。

つまり一義的には、キリストを信じ聖霊を与えられた者同士の中で、和解が起こり、和解が起こるよう促されるということです。

またそれ以上に、キリストにある神様との和解を経験し、神との平和を持つ恵みに与った者たちは、人間間の、民族間の、国家間の葛藤を和解へと変えたいという内から湧き上がってくる衝動を感じるようになります。

もちろん、先程も話しましたように、私たちの力量でなせるものではありませんから、内在して下さる聖霊様が促して下さらなければ和解は出来ませんが、促されたならば、ただ従うのみですし、従わないことの方が苦しくなります。

まるで、預言者エレミヤが、「聖書の御言葉を語ることは苦しくてつらくてたまらないから、もう金輪際語らない！」と宣言したにもかかわらず、むしろ語らないことでその御言葉が燃え盛る火のようになって内にしまっておくことが出来ずに、再び御言葉を語り始めたように、神との和解を経験させていただいた者ならば、和解を達成するよう促される時が来ますし、実のところ、いつでも促されていると言っても過言ではないでしょう。

Part Two

以前も一度お話ししたことがあります。私自身アメリカ留学中に、神様から強烈な和解の促しを受けて、「もうこれ以上和解したくない」という気持ちを心の内にしまっておくことが出来ないほどに苦しくなって、促された思いに従って行動を起こしたところ、和解の恵みを経験させていただいたことがありました。

家族6人でアメリカに行かなければならなくなった時、一番怖くて、夜も眠れない程に心配したのが経済的な事でした。

どんなにかき集めても、1年ちょっとで底を突いてしまうぐらいの経済力しかない状態で、子供たち4人連れて家族6人でアメリカに行かなければならない状況の中、一本の電話がありました。

めぐみ教会の駐車場でその電話に出たのですが、アメリカロスアンゼルスにいる30歳年上の従弟からの電話でした。

30歳も年上なので、私が学生の頃アメリカに1年間短期留学した時、父のように面倒を見てくれ、またその娘さんは私にとって姪にあたるでしょうか、1歳年下のその姪っ子を通して教会に行くようになり、イエス様に会うきっかけを作ってくれた恩人家族であり、私にとってアメリカにいる唯一の親族でした。

で、その従弟の兄さんからアメリカに旅立つ1か月ぐらい前でしょうか、突然電話がありました。

そしていきなり、「おい、豊和！ お前、家族6人でアメリカに留学に来るそうだな！ 金はあるのか？ 家族4人でロスアンジェルスで暮らしていくために必要な額をおまえは知っているのか？ ましてや6人での留學生活なんて無謀だぞ！ アメリカに来てからの働き口はあるのか？ もし無いなら、来るな！ 俺やジェインやダニーを当てにしてくれるな！」というようなことを突然言われました。

今となっては、私たち家族を心配しての言葉だったと思うのですが、その時は、私に対する暴言としか聞こえませんでした。

それまで、従弟家族が負担に思うかもしれないからと、私から従弟にアメリカに行くなんてことは一度も電話などかけて話したこともなければ、知らせたこともないのに、突然の国際電話に腹が立って「おい、ふざけんな！ あんた何様のつもりだ！ お前なんか家族でもないし、金輪際連絡なんかしてくれるな！」と言い放って電話を切りました。

怒りが収まらないので、家内に電話し、実家の母にも電話して、その従兄の悪口雑言を並べ立てました。

そして、電話番号や住所が分かるものはすべて消し、処分して、私からは従弟に一切連絡出来ないようにしてアメリカに行きました。

でも、心のどこかで、「奴が悪いんだから、奴から僕の連絡先なり、住所なりを調べて、僕のところの先に謝りに来たら会ってやる」というような思いがずっとありました。

それから2年半全く連絡も無ければ、私の方から会いに行ったり、連絡をしたりすることもありませんでした。

ですが、その2年半の間、心の内にうるさい程に響く声のようなものがありました。

「おい、豊和。本当にそれでいいのか？ お前だって、怒りにかまけて感情をぶつけて、30歳も年の離れたお父さんのような存在に、あんな失礼な言葉をぶつけておいて、おまえにも非があっただろう？

イエス様信じているんだらう？ イエス様によって神様と和解させていただいたんだらう？ で、お前牧師だろ？

何よりも、おい、豊和！ お前の論文のテーマが“和解”だろ？ 和解しなくちゃいけない人がいるのに、和解もしないで、和解について論文を書こうなんて、なんてふてぶてしい奴なんだ！ よく、この声を無視しながら、和解についての本を読むことが出来るな？」とずっと語り掛けられ、心が苦しくなつてつい降参しました。

降参して、インターネットで、ダメもとで、従弟の名前「Jason Hong」という名前を打って検索したところ、韓国からアメリカに移民してきた方々の同窓会名簿というのがあるのがあって、そこに、「Jason Hong」の情報が出てたんです。

不動産業をやっていること、住んでいるところ、年齢、電話番号等々の情報が出て来て、びっくりしました。

そこまで情報を得ることが出来たんですから、もう聖霊様の促しに従うほかありません。

祈りながら、意を決して、メールを送りました。

「ジェイソン兄さん、お元気でしょうか？ 私たち家族は、アメリカに来て2年半が経ち、フラワー神学校の家族寮で元気に暮らしています。2年半前の私の無礼をお許してください。また、その間連絡もせずにいたこともごめんなさい。もし許してくださるならば、一度、ご挨拶に伺ってもよろしいでしょうか」というようなメールをドキドキしながら送ったところ、「豊和。メールをくれてありがとう。私の方こそ、申し訳なかった。今度一度、お前たち家族と私たち家族全員で会おう」という返信が届きました。

そして、ついに会う日がやって来ました。

ドキドキしながら自宅に伺ったところ、兄さんも、その息子家族、娘家族、みんなとても喜んでくれて、20年ぶりに会い、涙を流しながら抱き合い、みんなで祈りました。

私たちが帰る時には、用意して下さっていた段ボールいっぱいの果物と食べ物と子供たちのお土産を下さり、「あ、本当に僕に対して申し訳ないと思っていたくださったんだ」という気持ちを感じました。

それから、アメリカを発つまでの半年間ちよくちよく会うようになって、私たちが日本に帰ってくる時には、姪っ子のジェイン家族にロスアンジェルス空港まで送ってもらいました。

こんな素晴らしいキリストにある和解と、こんな楽しい愛ある家族関係になるんだったら、もっと早く連絡を取って、和解しておけばよかったと、本当に後悔しました。

Part Three

こんな良い結末を迎えるとは露知らず、何でその間連絡できなかつたかと言いますと、「どうしても納得が行かないし、僕よりもあっちの方が悪いし、あっちから先に謝ってくれるなら、まあ赦してやってもいいけど」と思っていたからです。

そして、何よりも、「何でこんなことが、僕に降りかかるんだ！」という自分の人生、自分の置かれた状況、自分という人、そして、そんな心の苦しみを抱くようなところへと導いた神様が腹立たしく思えて仕方ありませんでした。

まあ神様にしてみれば、とんだとぼっちりでしょうが、私にしてみれば、「何なんだよ！」という思いでした。

言葉を変えますと、自分との和解が出来ていませんでした。

「自分という人の持つ特徴、自分という人が生きてきた歩み、自分という人が経験してきた痛み、なぜここに生まれたのか？ なぜこの国なのか？ なぜこの民族なのか？ なぜこの親なのか？ なぜこの体なのか？ なぜこの時代、なぜこの環境状況なのか？ なぜ、僕は僕として生きていかなければならないのか？」というようなことの納得と受容が出来ていない上での、さらなる納得のいかない鈍痛のような葛藤と対立に入れられていることが、どうにもこうにも納得が行きませんでした。

人間誰もが持つ中々納得のいかない疑問ですが、使徒パウロの手紙を読んで行きますと、そのすべての手紙に、パウロ自身の自分との和解が土台として敷かれていることに気付かされます。

無理矢理、自分の人生や生い立ちを自らに説得し言い聞かせるかのように、表面的な和解をしているのではなく、イエス・キリストというお方に出会って、キリストにある自らの人生の再解釈、生きる目的の再設定、なぜ私は私なのか？という最大の疑問との和解をさせていただく人生を歩めているからこそ、他者との和解へと目が行き、促され、促されていることを実践へと移すことが出来ていることを発見します。

そして、このイエス・キリストにある自分自身との和解が、万物の和解という大事な霊的眞実を見極め、悟るところへと導かれていることが見えてきます。

パウロは、先ず何よりも、自分との和解を経験させていただき、また自分との和解の途上でありながらの使徒としての歩みだったことが、彼の手紙を読みますと感じます。

例えば、

ローマ人への手紙 7 : 24 (パウロ)

コリント人への手紙第一 15 : 9 (パウロ)

テモテへの手紙第一 1 : 15 私はその罪人のかしらです。(パウロ)

というほどに、自分という人に納得も行かず、受け入れることも出来ない、同一人物の中に違う二人がいて、隔ての壁があって、互いに敵意を持っている状態にあったパウロが、自分との和解をキリストを信じることによって経験します。

そして、

ローマ人への手紙 1 : 1 (パウロ)

というアイデンティティーを自分の中で確立するに至り、そしてさらに、

ローマ人への手紙 8 : 32 - 39 (パウロ)

「我が人生それすべて、何ものをもキリスト・イエスにある神の愛から引き離すことの出来ない恵みに入れられている」という霊的悟りと共に、自分との和解

を経験しました。

パウロの手紙、どこを読んでも、キリストにある自分との和解の恵みが溢れています。

主イエスキリストに出会うということは、それまで納得のいかなかった自分との和解という恵みに与ることでもあります。

受け入れることの出来なかった自分の処遇、自分という存在、自分が置かれている状況や条件、それらが受容できるという和解を経験させていただくことが、神と人との和解、人と人との和解、万物の和解という福音の核、救いの中身についての悟りが深められていきます。

イエス・キリストを信じる者に変えられますと、神との和解を経験すると同時に、自分との和解へと導かれて行き、その和解が日々増し加えられていくことがパウロの生涯から良く見て取れますし、私たち自身も経験させていただきながら、日々を生きています。

Part Four

もし、キリストにある自分との和解が成立していないのに、他者との和解に関心が行き実践しようとしているならば、それは、人に見せるためのパフォーマンスであり、他者と自分の違いを見せつけ、自分の優位性を自分自身に示し、また他者にも見せつけて、自分を囲う隔ての壁を作って、自分で自分を慰める見せかけの平和ごっこでしかないでしょう。

私たちなんとなく皆そういうところを持っています。

聖書は、人間誰もが持つ自分との葛藤と対立を、神の愛によって、神の導きによって、神の御言葉によって、そして万物をお造りになった愛なる三位一体の神との出会いによって、自分との和解を経験させていただいた信仰者たちが沢山出てきます。

例えば、訳の分からない人身売買と13年間の奴隷生活を強いられたヨセフ、良いことしかしていないのに、王や国家から命を狙われて流浪の逃亡生活を長年送らなければならなかったダビデ、

自分の民族の敵であるアッシリア国に福音を宣べ伝えたは良いものの、憎き敵国の民たちが悔い改めて神に立ち返った姿が癩に障り、神様に「俺を殺してくれ！」と訴えたヨナ、

5回結婚した後5回離婚し、6回目は結婚せずに、また新たな男性と同棲生活を送っているそんな自分が恥ずかしくて、人目を避けていたサマリアの女、

姦淫しているところを現行犯で見つかり、素っ裸のまま群衆の前に引っ張り出されてきた女性、そしてイエス様を裏切ってしまったペテロも、皆すべて、「何でこんな人生なんだ！ 何でこんな私なんだ！ 何でこんな人たちに囲まれているんだ！ 何なんだ、この不幸な状況は！」と、自分との葛藤と対立に苦しみ

ましたが、みんなイエス様に出会って、自分との和解を経験しました。

神様は、イエス様は、聖霊様は、むやみやたらに「他者と和解しなさい！」なんていう風に強制したり、命令したりはなさいません。

委ねてくださいます。

そして、その委ねられたことを全うしたいと思えるように、自分との和解という恵みへと、まず導いてくださいます。

Conclusion

先週に引き続き、また家内と散歩しながら“和解”について話していると、家内から「あなたは、まだ自分との和解が出来ていないところがあるよね」と言われて、「ああ、確かにそうかもしれない」と思いました。

イエス様に出会って、神との平和とか、自分という存在の尊さとか、今が神様が私に与えてくださっている最善であり、導きであり、恵みであるという神様との根本的な和解には至っていると思うのですが、

心境的に、または肉体的に辛くなったり、追い込まれたりすると、すぐに「何でこんな育ちなんだ！ 何でこんな面倒くさい人間なんだ！ なんで僕は僕なんだ！」と、神様が肯定して下さっている存在であることを認めようとせず、自らを否定し、終いにはヨナのように「思い通りに行かなくてむかつきますから、どうか僕を殺して下さい！」と祈ったり、家族や親しい人に八つ当たりをしたりします。

もちろん、「そういう悪態をつくことをやってはいけません！」と言おうとしているのではなく、神様はそんな悪態を吐露することさえも用いて、私が私自身と和解できるころへと、私が私自身と平和を持てるころへと細部にわたって導いて下さっていることをお話ししたいんです。

また、キリストの和解と平和を知っている者として、私自身、誰かが私に悪態をつける安全な人、安心出来る人でありたいと願うんです。

使徒パウロも、ある意味、安心して悪態を付ける人だったんだと想像します。

だから、色々と言われるし、また言えるし、またそこに和解という何にも代えがたい喜びを体験出来たのでしょ。

私たち皆が、キリストにある自分との和解という恵みを経験し、そして、誰かが自分との和解に至るために、安心して悪態をつくことの出来る恵みの人であることを願います。

私たちを、神との和解、人との和解、万物の和解、そして自分との和解へと導いておられる主イエス様の御名を褒めたたえます。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 2：17